

# 英語の [V at N] 構文の意味の広がりに関する一考察

田尾俊輔

## 1. はじめに

本稿では、動詞に前置詞 *at* 句が後続する構文（以下、[V at N] 構文）について議論する。この形式に適合する代表的な構文としては、(1a-c)のような動能構文（Conative Construction）が挙げられる。(1a)に関しては、*hit me* 「私を殴った」は殴ったという結果に焦点が当たる一方で、*hit at me* 「私に殴りかかった」は「殴る」という私に働きかける動作に焦点が当たる。(1b)は、*cut the rope* 「ロープを切った」は切ったという結果に焦点が当たる一方で、*cut at the rope* 「ロープを切りつけた」は「切る」というロープに働きかける動作に焦点が当たる。さらに、(1c)については、*kicked the ball* 「ボールを蹴った」は蹴ったという結果に焦点が当たる一方で、*kicked at the ball* 「ボールを目掛けて足を振り下ろした」は「足を振り下ろす」というボールに働きかける動作に焦点が当たる。このように、動詞が表す動作の結果よりも、動詞が表す動作自体に着目するのが動能構文であるといえる。

- (1) a. He hit at me. (高見, 2018: 180)  
b. Mary cut at the rope. (*ibid.*)  
c. The boy kicked at the ball. (*ibid.*)

上記の動能構文は他動詞に *at* 句が後続する場合であるが、[V at N] 構文には、他にも(2)-(4)のように自動詞に *at* 句が後続する場合が当てはまる。双方とも [V at N] 構文と表記することができるものの、自動詞に *at* 句が伴う場合は、動能構文と同様に「働きかけ」の意味が含まれていると思われるが、自動詞が用いられるという点において、動能構文とは本質的には形式が異なるものである。

- (2) a. The dog ran at me. (イ, 2024: 120)  
b. He walked at her, but she would not yield. (COCA)  
(3) a. She spoke at me. (イ, 2024: 119)  
b. George was talking at me. (友繁, 2016: 144)  
(4) They looked at each other and smiled. (*ibid.*)

そこで本稿では、①動能構文における *at* 句と自動詞に伴う *at* 句の意味・機能の違いは何なのか、②その双方を [V at N] 構文の形式としてまとめることはできるのか、という2つの問いについて議論を行うことにする。

## 2. 動能構文における前置詞 *at*

動能構文には動作をキャンセルすることができるという特徴がある。他動詞文である(5a)はすでに虎を撃っていることが表されるため、*but missed it* で「虎を撃つ」という行為をキャンセルすることはできない。それに対して、動能構文である(5b)は「虎を撃とう」としている状況が表されており、*but missed it* で「虎を撃つ」という行為をキャンセルすることが可能である<sup>註1</sup>（草山, 2010: 120）。

- (5) a. \* I shot the tiger but missed it. (草山, 2010: 120)  
b. I shot at the tiger but missed it. (*ibid.*)

ここで、動詞が表す動作の結果状態については不問になっており、どのような動作が行われているかに焦点が当たることになる。それゆえに、動作の失敗や繰り返しを表すこともできる。撃つ対象である虎との距離感が意味に組み込まれていると考えられる。

上の(5b)は対象物との距離感が想定されるケースだが、次の(6a-c)の「ロープを切る」「パンを切る」「ドアを蹴る」はロープやパン、ドアとの距離が想定されるわけではなく、これらの動作自体は失敗しているとは考えづらい。ここでは、適切に切れていないことや音を立てるためにドアを蹴ることが表される（草山, 2010: 126-127）。

- (6) a. Mary cut at the rope. (=1b)  
b. John cut at the bread. (草山, 2010: 126)  
c. He kicked at the door. (*ibid.*)

上述の(5b)や(6a-c)のような動能構文は、対象物への影響や動作の完結性が排除される場合があるため、他動詞文よりも他動性が低いと考えられる。

## 3. 移動を表す自動詞に後続する前置詞 *at*

自動詞は本来的に *at* 句がなくても文法的に成立はするが、*at* を導入することで、行為の対象を表すことができる（吉川・五十嵐, 2013: 222）。*ran* 「走った」や *walked* 「歩いた」だけでも自動詞文として意味は成すが、(7a-b)

では動作の影響が及ぶ対象である *me* や *her* が付加的というよりも補語的に導入されている。「犬が私に飛びかかってきた」「彼は彼女に迫り寄った」という意味になる (イ, 2024: 119-120)。

(7) a. The dog ran at me. (=2a)

b. He walked at her, but she would not yield. (=2b)

ここでは、*at* 句によって一定の距離感を伴った対象物 (*me/her*) が想起され、*at* がない自動詞文よりも他動性が高くなっている。

#### 4. コミュニケーションを表す自動詞に後続する前置詞 *at*

コミュニケーションを表す自動詞の場合は、自動詞であるものの、動詞の意味フレームとして誰に話すのかを容易に想起することが可能である。話し相手は前置詞 *with* や *to* で表されることが多いが、*at* を用いると攻撃的な意味が生じる。(8a)の *shouted to me* は「私に聞こえるように大声で言った」という意であり、相手に声がしっかりと届くことが示されるのに対し、(8b)の *shouted at me* は「私を大声で叱った」という意味であり (イ, 2024: 119)、単に相手に声を聞かせること以上の意味が含まれることになる。

(8) a. She shouted to me. (イ, 2024: 119)

b. She shouted at me. (*ibid.*)

(8b)では、話し手と聞き手 (対象物 (*me*)) との距離が想定されてはならず、対象物に対する影響が表され、*at* がない自動詞文よりも他動性が高くなっている。

#### 5. 自動詞 *look* に後続する前置詞 *at*

(9a)の *look* は「見える」という意味だが、(9b)の *looked at* は「(対象物を) 見る」ことが表されている。(9b)では、視線を動かす一定の距離が導入され、見るという動作を被る「対象物」が付け加わることで、*at* がない自動詞文よりも他動性は若干高くなっているといえる。

(9) a. How do I look? (ウィズダム英和辞典)

b. They looked at each other and smiled. (=4)

#### 6. [V at N] 構文としてのネットワーク

Goldberg (1995) の構文文法の考え方に基づくと、2~5節で議論した各構文の上位構文である [V at N] 構文の意味は「対象物 N に動作 V を行うことにより何らかの働きかけを行う」とまとめられる。動能構文 (2節) では、[V at N] 構文の「働きかけ」が重視されることにより、結果状態への焦点が当たらなくなる。その結果、他動詞文よりも他動性は低くなる。その一方で、V に移動を表す自動詞 (3節) / コミュニケーションを表す自動詞 (4節) / 自動詞 *look* が入る場合 (5節) は、「働きかけ」の作用により、対象物への影響が多少なりとも導入されることになる。その結果、自動詞文よりも他動性が高くなる。

ここで、前置詞 *at* は「働きかけ」の意味を生じさせる要素になっていると考えられる。また、対象物をどのような距離感で捉えているのかについては、動詞が表す動作にも影響を受けているのではないと思われる。

#### 7. まとめと今後の課題

本稿では、[V at N] という形式に注目し、動詞単体、前置詞句単体あるいはそれらの単なる足し合わせで全体の意味が生み出されるのではなく、構文 (ネットワーク) として捉えられることを議論した。さらに議論を深めるためには、[V at N] 構文における個々の具体的な動詞の振る舞いや現象を詳細に検討することが求められる。

(註 1) 「虎を撃つ」動作の結果状態はキャンセルできるが、「弾を撃つ」動作は行われていると考えられる。したがって、正確には「撃った弾が外れた」という解釈である。もちろん、弾が当たる状況も動能構文で表せる。

**References:** Goldberg, Adele. E. (1995) *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press. / 草山学 (2010) 「英語の動能交替現象における事態認知と意味シフト」高崎経済大学地域政策学会『地域政策研究』12(4), 117-136. / イ・ギドン (2024) 『図説 英語の前置詞 (上)』開拓社. / 高見健一 (2018) 「他動詞表現と自動詞表現の意味の違い」池内正幸・窪菌晴夫・小菅和也 (編) 『英語学を英語授業に活かす: 市河賞の精神を受け継いで』開拓社, 177-195. / 友繁義典 (2016) 『英語の意味を極めるII 動詞・前置詞編』開拓社. / 吉川裕介・五十嵐海里 (2013) 「*at* 構文の構文的拡張と誇張解釈」英語語法文法学会『英語語法文法研究』20, 212-228. / コーパス: Davies, Mark (2008-) *The Corpus of Contemporary American English: 425 million words, 1990-present*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>. (本稿内では COCA) / 辞書: 井上永幸・赤野一郎 (編) (2015) 『ウィズダム英和辞典 第3版』東京: 三省堂.